

第四回「全農学生『酪農の夢』コンクール」

菊地啓介氏（那須塩原市三島 菊地則夫氏の後継者・那須拓陽高等学校）が最優秀賞を受賞



らこそその情熱や大きな夢を綴ってもらおうことで、

本人の将来への希望を膨らませてもらうと同時に、酪農の「現在」を支える人たちと、酪農の「未来」を築く人たちをつなぐ新たな機会となることを目的に開催され今回が四回目となります。また、第二回の大会において最優秀賞を受賞した高塩純さん（那須塩原市墓沼・那須拓陽高等学校）に続く

快挙であります。

菊地啓介氏は受賞に際し「担任の先生からコンクールの参加をすすめられチャレンジ

ジしてみようと考え応募しました。まさか、自分がこのような大きなコンクールで、最優秀賞を受賞できると思っていなかったのも、とても驚きました。今後も、この作文に書いたことが夢のまま終わらないよう実現に向けて勉強に励みたいのです。」と述べられました。今後も益々のご活躍が期待されます。

作品は、「あれから10年、このさき10年」と題し共進会や北海道実習の経験、牛群検定の実施・施設の更新・経営規模の拡大等を家族と話し合い、今後の具体的な経営ビジョンとプラン等を記すなど、前向

きに取り組む姿勢は大変勇気付けられる内容です。是非ご覧下さい。

「あれから10年、このさき10年」

両隣はエステサロンとスーパーマーケット。このような立地条件で私の家は酪農をしています。それ故に問題点も年々生じていますが、父や祖父が一生懸命に酪農をする姿は地域の方々にも理解して頂いており、「この先10年」という目標を掲げて前向きに経営努力を続けています。現在の経営規模は、経産牛三十頭、未經産牛十二頭に加え、飼料

このコンクールは、全国農業協同組合連合会（J A全農）が主催し、次世代の酪農を担っていく学生の方々に、若いか

畑五・二ヘクタールでイタリ
アングラス、裏作としてデン
トコーンとエンバクを栽培し、
全てサイレージ化によって通
年自家給与を実施しています。

幼い頃から父が運手するト
ラクターを見たり、恐怖心よ
りも先に牛と触れ合っていた
こともあり、酪農への興味は
兄弟の中でも一番ありました。
しかし、三百六十五日牛の世
話をして、春休みや夏休みには
飼料の収穫に追われる日々。
家族で外出しても日帰りしか
したことがなく、周りの友達



に家族旅行の話聞かされる
度、両親に「なんで僕だけ行
けないの」と、駄々をこねる
ことが多かったようです。

「牛の方が大事なんだ」と、
幼かった私にとって自分の家
が酪農家というのは大きなコ
ンプレックスとなっていきま
した。

小学校三年生になってすぐ
のことです。真夜中に起され
た私は、何もわからないまま
牛舎に連れていかれました。
牛舎の入り口に近づくと、牛
が苦しそうに鳴く声が聞こえ
ます。中に入ると、まさに分
娩の真っ最中でした。「気持
ち悪い」そう思った矢先に父
からロープを手渡され、言わ
れるがまま分娩介助を行いま
した。ただ、がむしゃらに引
張っていると母牛はますます
苦しそうに唸ります。「牛の
息づかいに合わせるんだ」父

からそう言われ、引いては緩
め、緩めては引いて、と繰り返
返しました。それまで味わっ
たことの無いただならぬ緊張
感と手汗の量。もう自分が限
界だと思った時、無事に仔牛
が生まれました。濡れた体を
タオルで拭いていると、生ま
れてきてくれたことに感動し
て涙が止まりませんでした。
この体験から、命と向き合っ
て仕事する酪農は、私の中で
「興味」から「使命」へと変
わっていったのです。

酪農家になるための第一歩
として、栃木県立那須拓陽高
校の農業経営化へ進学しまし
た。高校へ入学して間もなく、
担任の先生に勧められホルス
ティン共進会に参加しました。
先輩たちが毎日手塩にかけて
育て上げた牛たちを出品する
というので、私はその手伝い
をすることになりました。会

場に入ると、綺麗に毛刈りさ
れて白く輝く牛たちが並んで
います。賽會が始まると、ショ
ーリングをリードマンに引かれ
優雅に歩く牛たちに、私は思
わず見とれてしまいました。
「自分も良い牛を育てて、共
進会でリードしてみたい！」
胸がドキドキと高鳴ったこと
を今でも覚えています。

そして忘れもしない二年生の
春、一年間共に成長してきた
「タクヨウ リー キャシー
ダーハム」という牛のリー
ドマンを任せてもらえること
になりました。はじめはキャ
シー ダーハムがEX牛になっ
ていることや、はじめて経産
牛を任されたことが不安で、
リードマンを努める自信があ
りませんでした。しかし、出
品の二ヶ月前からはほぼ毎日
キャシー ダーハムを洗い、
調教を行っているうちに、自

分の歩調に自然と合わせるように歩いてくれるようになりました。

そして大会当日。ベストコンディションとはいえない状態のまま、私とキャシー、ダーハムはショールリングに入りました。審査員が体の隅々まで審査し、序列をつけています。「ダーハム、落ち着け。大丈夫」そう心の中でつぶやいて、キャシー、ダーハムの顔を見てみると「お前が落ち着けよ」と、目が笑っているように見えました。審査員に誘導されて歩くと、驚いたことに私とキャシー、ダーハムは先頭を歩いていたので。そして、リボンとトロフィーを授与された瞬間、私は夢だった優等賞一席を獲得した実感が湧いてきて、酪農の道を選んで本当に良かったんだと心から思いました。

また、その年の夏には北海道に酪農実習にも参加しました。実習に入った酪農家さんは総飼養頭数約二二〇頭、圃場面積が一〇〇haと、栃木県では見られない大規模経営（自給飼料主体）を実践されていました。フリーストール・ミルクングパーラー方式、TMR給与によって飼養管理を徹底しています。また、牧草の収穫作業は四戸共同で自走式フォールレージハーベスターを使うなど、効率的且つ高品質なサイレージ作りをしていました。大規模経営でも「土↓草↓牛」の循環型酪農を実現していることに驚き、まずは酪農家としての情熱、そして地域との連携があるからこそなんだと勉強になりました。共進会と北海道実習を通じて、飼養管理・牛群改良・循環型酪農など広い視点で学ぶ

ことができました。また、将来自分が実践してゆきたい経営スタイルが見えてきたように思います。

私が祖父と父の後を継ぎ、経営を任された時に実践したこと。その一つ目は牛群検定の実施です。飼養管理・繁殖管理・乳質管理・牛群管理といった生産全般に亘るチェックを行い、適正なボディコンディションを維持します。私は特に繁殖成績の向上を重点にしたいと考えています。繁殖成績が低下すると分娩間隔が延長するため、一生涯で生産できる仔牛の数が少なくなるのと同時に、乾乳期が長くなり、乾乳期が長いと過肥牛になりやすく、胎盤停滞や起立不能、脂肪肝などの発生が多くなり、発情発見率や妊娠率の低下の原因となります。例えば、搾乳期間を十一ヶ月

とした場合、空胎期間の目標は百十五日となりますが、これを超えると一日あたり千五百円もの損失になるといわれています。様々な面で経営に悪影響を及ぼすことから、優先的に早期の導入を目指します。

二つ目は施設の更新です。現在、搾乳牛を飼育している牛舎の牛床は短く、飼槽の設計が悪い為に飼料効率が一・五倍を超えることはありません。また、糞尿排出装置が完備されていないために、除糞から運搬までと労働条件は悪く、老朽化も激しいのが現状です。私は「牛にも人にも優しい牛舎」を基本としたタイストール牛舎への更新を目指します。三つ目は、機械化、自動化などの省力管理技術を導入します。家族人員限定という制

約の中で、より生産効率のアップや労働力不足を解決するには、最低でも粗飼料配合自動給餌機、搾乳ユニット自動搬送装置、繋ぎ牛舎用精密飼養管理システムを導入したいと考えています。牛舎管理の省力化に加えて、個体管理の精密化や飼料効果を詳細なデータにおいて自家検証できるので、病気や異常の早期発見にも繋がるはずです。

以上三つを実現させる上でも最も重要なのが、四つ目の目標である経営規模の拡大です。私は当初、北海道の農家に負けないような一〇〇頭規模に拡大しようと考えていました。しかし、理想とは裏腹に大幅な設備投資は当然のこととで、それに関わる借入金のことや粗飼料自給率の急速な低下、糞尿処理の深刻化、さらには労働力不足など、実際

の経営に係る諸問題については全く無知だったのです。最近では、父や祖父と今後の収入の見通しについてや乳価の動向についてなどを話し合っています。「十年前を振り返って、十年先を前向きに考える」のだと父は話します。地域の優良酪農家の経営を見学させていただき、そこでも十年先の話を行いました。するとやはり父と同じで、前向きな回答が返ってきたのです。そうやって今は自分なりに適正な経営規模を模索しています。現段階では、五〇頭規模を目指し、長命生産や自給飼料の安定的な確保、循環型酪農の確立が可能となった、また少しずつ規模拡大をしてもいいのではないかと、具体的なビジョンが浮かんできています。

これらのことを実現するために、今年度は大きな目標が

ありました。十月に北海道で開かれるはずだった第十三回全日本ホルスタイン共進会への出品です。口蹄疫問題によって目標は果たすことはできませんでしたが、今までの努力と経験を無駄にはせずに、いずれは我が家で育てた牛を出品させたいと思います。そして今年度は進路実現という戦いもあります。帯広畜産大学に必ず合格して、専門的知識や技術を徹底的に学び、家畜人工授精士の資格も取得したいと思っています。

そういえば、酪農の魅力を知った十年前。自宅の周りには田んぼや他の家の牛舎がたくさんありました。今は、住宅街の中に数件の農家が点在しています。酪農と向き合うこれからの十年。私は健土健民の哲学に沿った



循環型酪農を基本に、地域の農業、日本の酪農業に貢献できるような酪農家になりたいと思います。厳しいことも多いだろうけど、牛と共に少しずつゆったりと歩みながら。（この作品は昨年のコンクールに発表されたものです。現在、菊地啓介さんは帯広畜産大学に通いながら夢に向かって邁進しております。）